St. Luke's International University Repository

N地域で暮らす高齢者を対象とした会食会の機能に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-03-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 成木, 弘子, Nariki, Hiroko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014831

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

―― 原　著 ――

N地域で暮らす高齢者を対象とした会食会の機能に関する一考察―参加者の主観的な視点からの検討―

成　木　弘　子[1)]

要　　旨

本研究の目的は、地域住民が自主的に開催している高齢者を対象とした会食会について、参加者の主観的な視点からその機能を明らかにする事である。対象者は「東京都N区N会」で実施している「高齢者の為の会食会（以下D会食会）」を対象とし、参加者の中で、1）これまで3回以上出席した経験があり、2）年齢が65歳以上で、3）本研究の同意が得られた者7名を対象とした。研究方法はD会食会の場面に参加し参加観察を参考に加えながら、面接によるインタビューを中心に質的因子探索的研究を実施した。その結果以下の様な知見を得た。

D会食会の機能として、直接的には「1、家庭料理でのもてなしを受ける事での自己を尊重される機会」「2、新しい友人や役割を得る事（活動度を高める）によって孤独感を癒す機会」、間接的には「3、生活の満足感を向上する機会」、加えて「4、閉じこもりを予防する機会」を提供することが考えられた。また、ヘルスプロモーションの主要な活動である地域活動の強化という点でも、その一翼を担うのもであると考えられた。

看護職が地域の中で、インフォーマルサポートグループへの支援を行う際のアセスメントの視点としての活用が示唆された。

キーワーズ

高齢者　会食会機能　生活の満足感　活動度　ヘルスプロモーション

Ⅰ．はじめに

地域で暮らす高齢者にとって、生活の質を高める為にも寝たきり状態の発生を防ぐことは、重要な課題となっている。その為には、高齢者が自宅内だけに閉じこもる事や社会的に孤立した状態を防ぐ事が重要であるとも言われている[1)]。この閉じこもり状況を予防するために様々な試みが始められているが、専門職や行政の取り組み以外にも住民の自主的な活動も見られるようになってきている。また、サポートはインフォーマルサポートの役割にも注目され、家族のサポートのネガティブな側面を緩衝する機能等、その重要性が見いだされてきている[2)]。近年注目されているヘルスプロモーション活動展開に着目すると、個々人の健康づくりへの直接的なケアばかりでなく、地域全体の環境整備や仕組みづくりに関しても、地域活動の強化をいかに実践していくかが問われている[3)]。

本研究は、地域住民が自主的に開催している会食会（以下D会食会）について、参加者の主観的な視点からその機能を明らかにする事を目的として実施した。

Ⅱ．研究方法

D会食会の場面に参加し参加観察を参考に加えながら、面接によるインタビューを中心に質的因子探索的研究を実施した。

1．研究対象

「東京都N区N会」で実施している「高齢者の為の会食会」を対象として選定した。N会は「いつまでも健康で安心して住み続けられる地域づくり」を活動の目標として10年に渡り様々な活動を展開している有償のボランティア組織である。D会食会はN会が「閉じこもりの高齢者を減らす事が、寝たきり高齢者を減らす事である」と考えて始めた活動である。

本研究では、D会食会に参加している高齢者の中で、

1）日本赤十字看護大学（前：聖路加看護大学）

表１　対象者の概要

No.	年齢（性）	疾病等の状況	居住形態	現住所での居住期間	他の活動への参加状況	定期的な主な外出先	当会参加のきっかけ（参加回数）	日常生活の特徴
1	78歳（女）	高血圧で服薬中	独　居	60年間	・町会役員	・通院：２／月	民生委員の紹介（３回）	30代で夫と死別後70歳まで仕事。独立した子ども達との交流はあまりない。友達や近所との交流も多い。周囲に感謝し暮らす
2	74歳（男）	緑内障と白内障の視力障害	独　居	60年間	・複数のシニアボランティア活動 ・Ｄ会食会サポーター	・左記に加え通院：３／月	リーダーからの声掛け（12回）	７年前に同居の親戚と死別。会社を定年退職後ボランティア活動をし、本会にも役立っている事を楽しみに参加。視力障害。
3	78歳（女）	骨折後の後遺症で通院中	娘と同居だが日中独居	72年間	・老人会：１／月	・左記に加え指圧：４／月	民生委員の紹介（３回）	60歳まで仕事、現在は気ままに家事をし室内生活が多く、たまに友達宅へ外出。同居の娘とは顔を合わせる程度。日中独居。
4	83歳（男）	無し	独　居	40年間	・無し	・毎日喫茶店でコーヒーを飲む	民生委員の紹介（３回）	妻と死別後独居。1／w娘宅に外泊。今の生活は寂しいが仕方がないと思っている。
5	82歳（女）	不眠で服薬中	独　居	15年間	・工作の会：４／月 ・体操の会：５／月 ・Ｈ会食会：１／月	・左記に加え時々友人と旅行へ	N会の会員だから（20回）	10年前夫と死別後独居。子ども達から同居の誘いはある。親しい友人と交流したり様々な活動に参加しているが寂しく神経質。
6	76歳（男）	高血圧で服薬中	痴呆症の妻と二人暮し	15年間	・登山の会：４／月	・左記以外は妻の介護の為外出無し	N会の会員だから（３回）	娘家族が転居してから痴呆症の妻と二人暮らし。妻は夫がいなくなると不安がる。今後の対応を模索しながら妻と当会へ参加。
7	87歳（女）	無し	４世代同居	52年間	・老人会（たまに） ・ラジオ体操の集まり：１／日	・左記の他は無し	民生委員の紹介（22回）	４世代６人家族だが、３回の食事以外は家族との交流はなく、早朝の散歩やラジオ体操の他は自室で一人きり。長生きは大変と。

1）これまで3回以上出席した経験があり、2）年齢が65歳以上で、3）本研究の同意が得られた者7名を対象とした。

2．データ収集方法

データ収集に先立ち、当日の会食会へサポーターとして参加し、対象者への接近をはかるとともに、参加観察を行いデータ分析時の参考とした。データ収集は、活動の程度や人間関係などの日常生活の状況・社会や家庭での役割・生活の満足感・家族構成・居住環境等に関して、半構成的な質問により面接を行った。
具体的には「参加の理由をお聞かせください、参加してうれしかった事や大変だった事はありましたか、心配事や悩み事は誰に相談しますか」などである。

3．分析方法

研究対象者の許可を得て、録音した内容を逐語記録し、その言葉を分析の対象とした。語られた内容の中から、D会食会に関する期待と満足、生活の満足感が現れている内容を抽出し、類似の内容をまとめて分類した。さらに、D会食会の機能を検討するとともに、生活の満足感と会食会の機能の関連図を作成した。

Ⅲ．結　果

データ収集は、平成7年12月23日及び平成8年1月22日の2回に渡りD会食会に準備の段階から参加し、対象者への接近を計りながら観察を行い、会食会が終了した時点でインタビューガイドに基づいて面接調査を実施した。面接時間は30分～60分（平均43分）であった。

1．D会食会の概要

D会食会は、その母体であるN会のシステムの一つとして位置づけられている。D会食会を開始するにあたり、地域の一人暮らしの高齢者を中心とした189名に対して訪問調査を実施し、日常生活の状況や食生活の状況を把握した。その結果を踏まえ、D会食会は1995年1月から毎月1回、昼食を挟んで2時間程度のペースで続けられている。

1回の参加者は、継続参加者が10名、新規参加者が10名の合計20名である。また、食事づくりの担当者は、地域のネットワークを広げるために、中年女性が結成している「地域の食事ボランティア2グループ」と「寝たきり老人家族会の卒業生で構成する1グループ」に依頼している。さらに、会の設営や参加者の送迎や参加者をも

表2　D会食への期待と満足

期待	機会としての期待（中項目）	個人としての期待（小項目）	事例No. 1	2	3	4	5	6	7
1、家庭料理でのもてなし	1）家庭料理を味わう機会	(1) 美味しい家庭料理が食べたい		○	○	○	○		
		(2) 高齢者に合わせたメニューのものを食べたい					○		○
		(3) ご馳走が食べたい	○	○		○	○		○
		(4) 手作りの食事が食べたい		○		○	○		
		(5) 日常と変わった食事が食べたい			○				
	2）楽しい会話のある食事をする機会	(1) おしゃべりがしたい	○	○	○	○	○	○	○
		(2) なごやかな雰囲気が欲しい		○				○	
		(3) 会話のある食事がしたい			○		○		○
	3）新しい料理を知る機会	(1) 新しい料理を日常の食事へ取り入れたい	○		○		○		
		(2) 帰宅後メニューを見て楽しみたい					○		○
2、新しい関係作り	1）新しい友達を得る機会	(1) 笑いあえる気軽な友達が欲しい							●
		(2) 理解してくれる友達が欲しい						●	●
		(3) 同性や異性の友達が欲しい	●	●		●			●
		(4) 地域に知り合いが欲しい	○		●	○		○	●
	2）新しい役割を得る機会	(1) 食べるだけでなく役立ちたい		○					
		(2) 食べるだけでなく特技を生かしたい						●	

○：期待し満足している事柄
●：期待しているが満足していない事柄

表3　生活満足感

満足感	生活態度（中項目）	個人の生活態度（小項目）	事例No. 1	2	3	4	5	6	7
1、前向き	1）積極的な生活の受け止め	(1) 人生を肯定し感謝の気持ちでの生活	○						
	2）自然な生活の受け止め	(1) 人生の流れのままに生きる		○					
		(2) 平穏無事に生きる			○				
2、消極的	1）あきらめの生活の受け止め	(1) 寂しいが仕方がない				○			
		(2) 寂しい、工夫しているが生きる事は大変					○		
	2）毎日が大変な生活という受け止め	(1) 大変だが仕方がない						○	
		(2) 徳が無いから仕方がない、長生きは大変							○

てなす役割の様々な年齢のサポーターが5名前後参加している。

2．事例紹介

1）事例の概要

本研究の7名の対象者（内男性2名）の概要を表1に示す。年齢は74歳～87歳（平均79.7歳）、現在の地域への居住期間は15年間～72年間（平均47年間）である。居住形態は独居である者が4名、娘あるいは妻との二人暮らしの者が2名、4世代同居である者が1名であった。D会食会への参加回数は、3回～20回（平均9.4回）であった。

現在の生活状況を見ると、病気や障害は5名に見られたが、日常の移動には影響が無く、全ての者が単独での外出が可能な状況であった。家庭や社会の中での役割に注目すると、家庭内での役割は事例1～6には見られ、社会の中での役割は事例1・2のみに見られた。子供がいないあるいは関わりが少ない状況は事例2・7であった。気軽につきあえる友人や知人がいる者は事例1～3及び事例5であった。

2）D会食会への期待と満足（表2）

インタビューの結果から、D会食会への期待と参加後の満足を表2の様に整理する事ができた。参加する事への期待は「家庭料理のもてなし」と「新しい関係づくり」の2つの要因であった。

「家庭料理のもてなし」は、おいしい家庭料理や手作り料理への期待としての“家庭料理を味わう機会”、なごやかな雰囲気の中でおしゃべりをしながら楽しみたいという期待としての“楽しい会話のある食事をする機会”、メニューや料理内容に関しての期待を表した“新しい料理を知る機会”が見られた。

「新しい関係づくり」は、同性ばかりでなく様々な人達と知り合いになりたいという期待としての“新しい友人を得る機会”、役立ちたい特技を生かしたいという期待としての“新しい役割を得る機会”であった。

また、これらの期待を満足という視点から見ると、「家庭料理のもてなし」に関しては全員が満足している状況がみられたが、「新しい関係」に関しては、6名の者が何らかの期待をもっていたが、全く満足が得られていない者が2名状況が見られ、4名の者に関してもその期待が十分に満足されていない状況が見られた。特に「新しい友達をつくる機会」は、6名の者が期待し、特に事例7はその期待の大きさに比べ全く満足を得られていない状況が見られた。

3）生活の満足感（表3）

参加者が「自分の生活全体をどの様に受け止めているか・満足しているか」という問い対して「前向な満足（事例1～3）」と「消極的な満足感（事例4～7）」としてとらえられた。

「前向な満足感」は、人生を肯定し感謝の気持ちで生活しているという態度である“積極的な生活の受け止め”と、人生の流れのままに平穏無事に生きるという態度である“自然な生活の受け止め”として整理する事ができた。

「消極的な満足感」は、現状は色々あるが仕方がないという態度である“あきらめの生活の受け止め”、長生きや一人暮らしは毎日が大変という態度である“毎日が大変という受け止め”であった。該当した事例4～7は、家族や近隣との交流が少なく寂しさを訴えている状況であった。

3．D会食会の機能

参加者の主観的な視点からのD会食会の機能は、【発揮されている機能】と【潜在している機能】の2つに整理してとらえる事ができた。

【発揮されている機能】は、参加者が期待し満足を得ている機能とし「家庭料理のもてなしの機会」ととらえた。実際の会食会の場面では、美しく盛りつけられた手

作りの料理を食べながら、参加者一人一人へ声掛けがなされたり、発言が丁寧に受け止められたり、音楽療法士を交えた合唱が企画されていて、非常になごやかな暖かい雰囲気がつくりだされていた。参加者も穏やかな表情でくつろぎながら会話と食事を楽しんでいる姿が見られた。

【潜在している機能】は、参加者が期待しているが現実的には十分な満足を得ることが出来ない機能とし、「新しい関係づくりの機会」ととらえた。実際の会食会の場面では、会食会の時間以外での参加者の交流をつくる機会が設定されておらず、会食会だけの関係にとどまっており、事例2以外では「もてなす側ともてなされる側」の関係が見られた。事例2はサポーターという新しい役割を得、会場設営の陣頭指揮をとったり、新しい参加者の話し相手を引き受けるといった姿が見られ、インタビューの中でも「ここで人の役に立つのはとてもうれしい……」と語られていた。その他、会食会で出会った人々と会食会以外の日常生活の中で、挨拶したり、簡単な相談相手にしたりする関係へ発展している様子が3名から語られた。

Ⅳ. 考　察

1．D会食会への期待

D会食会への参加者の期待として「家庭料理のもてなし」が見られた。単に美味しい食事を味わう機会と位置づけられているだけでなく、楽しい会話での満足を全ての参加者が得ている。南は、日本人の自我概念の特徴を「他者からみられた自分、他者から見た自己像」の意識が強く、他者からの評価を受け取る傾向があると指摘してる[4]。日常の生活の中で寂しさを感じている者にとって、一人一人が暖かく迎えられ、発言が尊重されるという体験は、孤独感を減少させ、自分自身の存在を肯定的にとらえる体験となっている機会と考えられた。

また、「新しい関係づくり」への期待も参加者のニーズである。高齢者の孤独感や関係性に関する満足感に関しては、問題解決的なサポートよりも、ともに余暇を過ごしたり何気ない会話を楽しむような友人との交流の方が大きな効果を持つといわれている[5]。この様な理由で、今回の研究対象となった参加者も現在の友人の有無や家族の有無に関わらず、対象者の全員の期待として見られたのではないかと考えられた。次に高齢者にとっての役割という点に着目すると、定年退職に伴う社会的な役割の喪失は現実にあるが、いつまでも人の役に立ちたいという要求は、人間の高次の要求として残っている。会食会で役割を獲得できた参加者は「誰かの役に立ちたい」という要求を満たす機会となっていると考えることができた。

2．生活の満足感

生活の満足観に関しては研究者毎に様々に定義されているが、S.Zalaiは「個人の生活の良い特性、満足できる特性に関して総合的に評価したもの」としている[6]。高齢者の主観的幸福感の要因分析の結果では、健康度・社会経済的地位・社会的活動の3つが最も大きな影響を及ぼしている事は確認されている[7]。また、老化への適応タイプとして、良適応状況としての〈活動型〉、不適応としての〈受け身型〉〈くたびれた勇者型〉と分類している場合もある[8]。

本研究における対象者の生活の満足感は「前向きな生活感」と「消極的な生活感」の2つにまとめられ、人生を肯定的に受け止め対応しその結果「生活の満足感が高いグループ」と、人生をあきらめたり失望したりし、その結果「生活の満足感がやや低いグループ」としてとらえる事ができた。

D会食会が参加者の主観的な生活の満足観を高める為に役立つ側面は、主観的な幸福感の要因の社会活動の面であると考えられる。社会的活動は趣味や一人でする活動を指しているのではなく、他者との関係（相互作用）を意味している[9]。その為にも、様々な人が交流し何らかの役割を獲得していく機会の必要であると考えられた。

3．D会食会の機能

D会食会への期待・参加者の生活の満足感・D会食会の顕在的・潜在的機能をあわせて検討し図1の様に関連づけた。

D会食会への参加は、家庭料理でのもてなしを受ける事で自己を尊重される機会となったり、新しい友人や役割を得る事によって孤独感を癒す機会となったりし、結

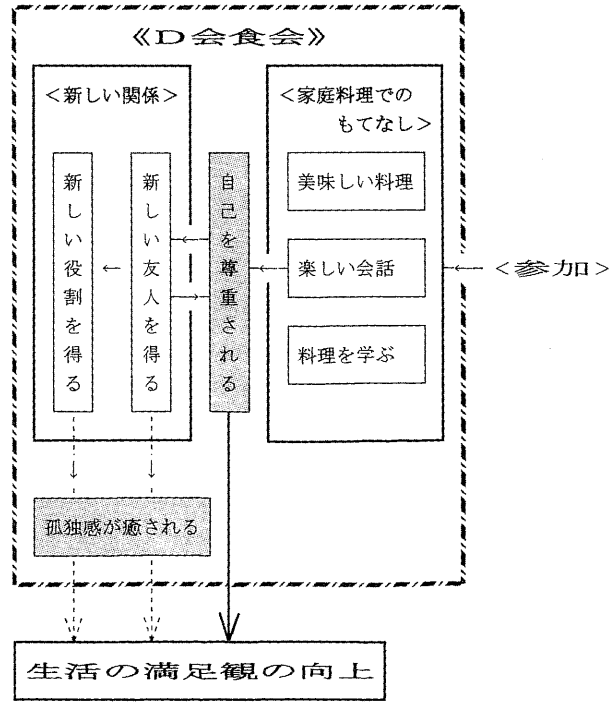

図1　D会食会の機能

果として生活の満足感を向上する機会となっていると考えられた。活動理論では「高齢者の生活満足度は、役割喪失が少ないと活動度が大きくなり、役割支持もまし、肯定的な自我概念が多くなる事によって高められる」[10]とされている。本研究結果と若干流れが異なるが、「役割・活動度・自我概念」という3つの構成要素は重なるものであった。

Maguireは，インフォーマルサポートの中でも、より組織化された支援組織（ボランティやセルフヘルプグループ）に参加している高齢者は、より良い自己評価を持ち、長生きする事や健康でいる事と関係があると報告している[11]。

D会食会は参加者に地域の中において「生活の満足」を得る機会を提供する機能を持ち、高齢者が自宅から外に出ようとする機会を増やし、心身の機能を維持する効果が期待されると考えられた。さらに、長期的な予防という観点からとらえると、「閉じこもりから廃様性症候群、さらに寝たきり状況の発生」というプロセスを、最初の段階で回避する効果も期待できると考えられる。

充分発揮されていない機能として「新しい関係づくり」がみられた。この要因としては主催者の意図が「もてなす」という部分に重きが置かれている為に両者の意識にズレが生じていると考えられた。今後の改善を期待する部分である。

また、ヘルスプロモーションにおける活動の主要な概念である地域活動の強化という面においても、D会食会はその一翼を担うものであると考えられた。ボランティアの役割は「社会的孤立・孤独を防ぐことであるとともに、広く社会制度にも働きかけ結びつけていく“パイプ役”となったりするだけでなく、社会制度を開拓する“パイオニア”としても、自主的に社会的な働きかけをしていこうとするものである」といわれている[12]。D会食会は地域の高齢者の中に「孤独で癒されたい」「新しい関係づくりが欲しい」というニーズの存在を確認する機会ともなっている。この様に住民が自分たちの地域の問題や解決方法を見いだしていく事は、コミュニティエンパワーメントという視点からも意味のあることであると考える。

4．看護活動への提言

地域においてインファーマル・サポート形成への支援を行う立場でもある看護職は、その活動の目的・活動方法の選択・評価に関して、系統的にアセスメントする視点を養う必要があるとされてきたが、具体的な援助方法や機能に関しては明らかにされていない状況である[13]。本研究ではその視点として今回抽出した機能の活用を期待する。

V．結　論

住民の自主活動であるD会食会の機能を参加者の主観的な視点から考察を加えた結果、D会食会の機能として、「1、家庭料理でのもてなしを受ける事での自己を尊重される機会」「2、新しい友人や役割を得る事によって孤独感を癒す機会」「3、生活の満足感を向上する機会」「4、閉じこもりを予防する機会」を提供することが考えられた。また、インフォーマルサポートグループへの支援を行う看護職へのアセスメントの視点としての活用が示唆された。

今後の課題としては、本研究は参加者の一部を対象として実施したために、今後さらに対象者を増やし洗練していく必要がある。

謝　辞

本研究にご協力をいただきましたN福祉を考える会並びにD会食会の皆さまに深く感謝申し上げるものである。

なお、本研究は聖路加看護大学WHO連絡委員会が「平成7年度笹川医学医療研究財団の助成」を受け、実施した研究の一部に修正を加えたものである。また、第16回看護科学学会に於いても一部を報告した。

引用文献

1）竹内孝仁：通所ケア学、医歯薬出版、25－26、1996.
2）谷井康子：独居女性老人のインフォーマルサポートシステムについて、神戸市立看護短期大学紀要、12、91－100、1993.
3）島内憲夫：ヘルスプロモーション：WHOオタワ憲章、垣内出版、49－50、1990.
4）南博：日本人的自我、1－10、岩波新書、1983.
5）浦光博：支えあう人と人、サイエンス社、118－119、1992.
6）柴田博ほか編：老人の社会学理論老年学入門、川島書店、211－218、1993.
7）古谷野亘ほか：都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関する要因、老年社会科学、16(2)、118－119、1995.
8）下中順子：老化の心理的アプローチ、折茂肇ほか編：新老年学、1330-1332、東京大学出版会、1998.
9）前掲書6）41－44.
10）同上.
11）小松源助ほか訳：ソーシャルサポートシステム、153、川島書店、1994.
12）牧里毎治：ソーシャルサポートネット・ワークにおけるボランティアの役割と展望、社会福祉研究、42、35、1988.
13）吉田亨ほか：「自主グループ」の形成発展過程と保健婦の役割、保健婦雑誌、54(10)、889、1998.

—— 英文抄録 ——

Function of luncheon parties held for the elderly who live in a N-district of Tokyo : Subjective opinions of the elderly participants

Hiroko Naruki
(The Japanese Red Cross College of Nursing)

The purpose of this study was to clarify the role of the luncheon club meetings that are held for the elderly by volunteers in N district of Tokyo. The study was conducted by obtaining the subjective opinions of elderly participants who attended the luncheon club meetings held by N group in N district in Tokyo (herein, D-party). The subjects of this study were elderly participants: (1) who had participated in at least 3 such luncheon parties, (2) whose age was over 65 years, and (3) who agreed to participate in this study. Seven subjects were included in this study. A factor-searching study was performed by observing the participants during the party and by interviewing them after the party.

The results showed that the functions of the D-party are: (1) it provides the participants with a feeling of esteem by entertaining them with a homemaking course, (2) it has a healing effect on their loneliness through making friends or participating in playing some roles (increase the competence of health promotion), (3) it improves their quality of life, and (4) it assists them to escape from a house-bound situation. Such parties also play an important role as a health promotion activity of the region. The results of this study may be used by nurses who assist the informal support group of the region to assess the function of such activity.

Key words
elderly　function of luncheon club meeting　quality of life　competence　health promotion